ドイツ便り

西独逸に於ける 国際児童福祉連合総会 国際社会事業会議に出席して

松島正儀

一九五六年七月三十日より八月三日まで五日間、西ドイツのボン市で、国際児童福祉連合総会が開催せられるに当つて、筆者は日本の民間側代表に選ばれ出席することとなつた。更に幸いなことには同年八月五日より六日間、西ドイツ、ミュンヘン市に於て、第八回国際社会事業会議が開催せらるることとなつており、この会議出席の代表も同時に責任を果す光栄を担つた。政府代表は厚生省の児童局長高田浩運氏と、社会局庶務課長大崎氏であり、他に社大の仲村助教授と愛知県社協の石黒会長が日本より正式代表を務められた。

一

先ずボンに於ける国際児童福祉連合総会がどんな会場で、どんな議題のもとに、どんな風に進められたかを述べましよう。

会議の開催地に選ばれた「ボン」は、現在西ドイツの首都であり、新聞や放送に世界の経済や政治産業に極めて国際性の高い所である。落ついた静かな大学町であつて、殊にボン大学は、マルクス、ランゲ等を世に送つて有名である。また楽聖ベートーヴェンの生家はボン大学より三分、世界の広場の一つミュンスターは、ボンの中心地にある。市内は未だ爆撃のあとが相当に残つているが、街は清潔そのもので白い壁にくつきり浮き出た家々の窓には、花を愛する国民の思惜が飾られ溢れて美しいものであつた。静かに流るるライン河畔のこのボンは一三四六年皇帝カルル四世の即位の地で、ボッペルスドルフ城、アレキサンダー大王博物館等が存し、歴史上ドイツの消長と大いなる関聯もあるが、一七七七年以後科学アカデミーの中心となり、ドイツ民族の頭脳を育てる大学町と変つて今日に至つている。

これ等の地域的背景の中に、ドイツ連邦国会議事堂（Bundeshaus）があり、この議事堂も第二次大戦後、国民の苦しみの中では官、公建物の新築をせぬ方針で、教育大の建物の改造して間に合せているものである。前庭もなく質素な建物で、上院、下院に別れており、上院即ち日本の参議院に当る建物が、今回の国際児童福祉連合総会並びに研究会議場に充てられたのである。

上院がなぜ会場に選ばれたか、筆者には甚だ興味のある問題なので秘かにたずねてみて、感激した、即ちこの上院を会場に定めるについてドイツ側の為政者は、ドイツは青少年問題に政治の価値を認めている。世界の児童の福祉を念ずる人々をドイツに迎えるこの時、建物は粗末だが、この国に於ける政治責任者の児童福祉に対する態度を汲み取つていただきたい、との考え方が基本となつて会場が決定されたとのことであつた。学ぶべきものがあるし、日本の場

合と比較して羨ましかつた。

次に議題は主要議題として、「家庭との関聯に於ける児童福祉の諸問題」であつて、両親がその役割を果すためにいかに援助すべきか、両親教育はいかにあるべきか、学校及び児童センター、青少年運動等は、どのように家庭と協力すべきか、また児童福祉施設の役割、それ等の施設と家庭との協力、これ等が協議の内容となつておつた。

更に「健康又は教育のため、家庭から離れた児童について」「問題のある家庭または破壊された家庭に於ける児童について」「特殊な環境に於ける家族関係の問題」について、専門委員会が構成せられ、連合当局に於て周到に準備せられたものにつき討議が持たれた。協議及び会議全体を通じて、連合が将来に向かつて果さるべき役割は、「全世界の児童の欲求の充足性」についてであり、時には有用な勧告をも試みるであろうが、国際連合としての焦点は、協議決定事項への協力性の問題となろう。

会議は協議研究の外に、連合の総会でもあるので、これは日本での各種団体の総会と変りなく、役員選任は実にだらだらと時間を費し、また財政及び管理の問題では、各国が連合に払う分担金で容易に結論が出ず、聊かだれ気味であつた。

会議はどんなように進められたか、第一日の開会式は、ブンデスハウス上院で、参会者約三〇〇名、開会宣言とともにボン市の青年代表五〇名ばかりのコーラスにより始められた。指揮者は音楽大の教授エルハルト氏、木管楽器フルート一本が間奏されておつたが、音色の美しさは印象的で、議事堂で聞かされたコーラスと共に、音楽の国ドイツを思わせるのに充分であつた。

第一日は国連代表、ドイツ政府代表等挨拶を以て開会式を終り、レセプション、第二日目より協議研究に入つたが、会場にはイヤホーンの設備がないため、英独仏の三カ国語入り乱れ、一々これを英語より独逸語にそして仏蘭西語に通訳を繰返すので、十分は卅分となり、一時間は三時間となるわけで会場はだれ気味、能率ある討議には達しなかつた。

この児童福祉連合総会会議に日本から正式参加ははじめてであり、連合は非常に悦び、代表団の代表たる高田児童局長はたびたびメインテーブル主役に席を与えられ、又副議長を日本代表団より出させられた。また日本代表の公式発言は、会衆に多大の感銘を与えたが、東洋人の発言が少なく、公式会合では始めてのもので、日本は非常な注目を浴びた、児童福祉の面で日本が国際的に発言権を得る態勢が、前進したとみられ、東洋の参加者が少なかつたこととも合せ、会場に於ける一異彩であつた。

日本の代表団は会議場でも、レセプションでも大もてであつた。然し会話の不自由さは嘆きの種であつた。各国の参加者の中には英、独、仏、三カ国語に能弁な者が相当あつて辛うじて英語を理解する、日本代表団は聊かあわれであつた。欧洲の事情は国民が国境を越えて往来が自由であり、相互の言葉を理解する機会をもつているからであろう。従つてその国際性も素晴しく羨ましい限りである。これは欧洲が特に航空機の利用度が高く、これを中心とする各種交通機関の流通性に、一層の交流度を高めていることがその原因であり結果でもあろう。とに角ヨーロッパでの国際会議に出席するには、英独仏三カ国語に、少なくも英

独二カ国語には通ずる準備の必要なることを感じた。

最後に国際児童福祉連合は現在その本拠をゼネバに置いて、ゼネバ宣言として知られている児童の権利宣言の諸原理を基本とし、活動しているもので、その目的は「児童の権利宣言の周知徹底、困窮状態にある児童の救済、児童福祉の水準を高めること、児童の身心の発達に寄与すること」である。これ等の目的を達成するための諸調査が行われ、又各国の同種団体活動促進と相互間の連絡調整が行われ、そのために必要な基金を分担することとなつており、日本は一九五六年一月分担金を納付し、今回の国際会議に正式メムバーとして初参加したのであつた。

この国際児童福祉連合は三〇余年の歴史を持ち世界の主要国四一カ国と六七の児童福祉関係団体により構成されているものである。尚一九五八年十一月国際社会事業会議が日本、東京で開催せられる折、その前後の時を選んで、第二回国際児童福祉研究会議が開催されることになつている。（一九五八年の国際児童福祉連合総会はベルギーのブラッセルで開催が決定している）

×

次に国際社会事業会議のことであるが、この会議は既に第八回のものであり、前述の児童福祉会議はしんみりとした家族的な会議であつたのに比べて、参加者は約三、〇〇〇名、国際会議の中でも、大規模な会合であり、所謂祭典を伴う大会であつた。

会議の場所は西ドイツのミュンヘンで、ベルリン、ハンブルグにつぐ大都市で、バイエルン王国の都でもある。南にアルプスを眺めイザール川に添う、芸術の都とビールで有名である。第二次大戦により市街の五〇％は爆撃されたが、今や八〇％は復旧し、静かなゆかしさを持ちながら、文化、交通、商工業の中心地となつている所である。

国際社会事業会議の開会式は、イザール川の橋のたもと、国立ミュージアムの特別大ホールで開かれ、ボンの国際児童福祉連合総会と同様、音楽で始まつた。畳百畳敷位の広さの壇上にオーケストラ演奏席、その席の周囲にはピンク、白、赤さまざまの生花をもつて花園の如く飾り、後方には世界各国より参加五七カ国の国旗が併立していた。場内は大理石造り、天井は日本の格天井式のしぶい彫刻づくめ、金色にルリ色の水晶体のシャンデリヤが八個、その景は、さながら絵画のような美しさであり、また清純な雰囲気も感じられて、社会事業家人間集団のインターナショナルに於ける理想像の表現の場の如くに映じた。

式はまず会議成立宣言、続いてオーケストラの演奏、ベートーヴェン、レオナー三一番の後、英国社協、会長ヂョーヂ・E・ヘインズ氏、ドイツ連邦大臣並びに国会代表、ミュンヘン市長と奨励、歓迎の言葉は続いたが、みんなユーモアに富んだもので、親しみ易く、会場はお互いに言葉は不調であるが、親近感と和やかさに充たされていた。会場は三、〇〇〇名全部にはイヤーホンの設備が間に合わず、演説は英語の場合、これを独、仏にそれぞれ訳すため、時間が三倍もかかり残念であつた。演説終了後、正式のオーケストラ演奏がなされ、ミュンヘンの国際的指揮者クルトグランケ氏がタクト

を振い、モツアルトのジュピター交響楽四一番が演奏されたが、さすがに素晴しいもので、全参加者も国境を越えて偉大なる感動をおぼえたらしく、アンコールは三回に及んだが日本のように安売はしなかつた。

とにかく国際的規模に於ける大音楽会という感じで、筆者もうつとりとした。音楽の都芸術の国ドイツの面目はここに果され、開会式三千人の大祭典は効果一〇〇パーセントであつた。かくして第八回国際社会事業会議の開会式は終つたが、これは一九二八年パリーに於て第一回国際社会事業会議が発足して以来、最大のスケールであつたと言われる。

第二日目からは二〇のスタデーグループが四日間にわたつて持たれ、この会場はミュンヘン大学が全部用いられた。毎日の日程は相当に充実していて、翌日の朝は各会場の討議状況が、英、独、仏語にプリントされ手渡される準備がなされていた。各グループのスタデーはみなイヤーホンが無いため、時間は三倍かかり各会場とも幾分だれ気味が感じられた。国際会議とは忍耐心を養う所であるのか、容易な業でなかつた。それにしても発表論旨は、格別変つたものではなく、日本で論じられているものと大差はなく、日本の研究も相当に進んでいることを知り得たがこの点いささか期待はずれである。

二〇のスタデーグループを持つた会場は、ミュンヘン大学であつたが、この大学は爆撃されて入口附近は被爆の害がそのままになつているが、中は完全に修繕されて立派なものであつた。学生や教授を大切にし、講義には完全を期しつつも戦後十年外観を気にせず、然も国際会議のスタデーグループの討議場に当てているなど、いかにもドイツらしいと思つた。

今回の国際社会事業会議の主題は「工業化とその家庭及び地域社会のための社会事業に及ぼす影響——社会事業活動はいかに展開されるべきか」の問題を中心として進められた。産業界に於ける生産機械の革命的技術的進歩と労働者、又労働家庭との関聯に於ける社会施設の役割、更に進んで健康又は教育のための対策、問題のある家庭又は破壊家庭のための施策等、工業化過程の進展、その他の経済事情の変化にもとづく新時代と目される新しい生活様式に適応関係を考えることは、なかなか容易なことではない。要するにオートメイションの問題を中心として、家庭、社会、施設活動の三点が焦点となつて討議せられたが、一方に都市化及び都市的形態の進むにつれ、それに伴いまたプロセスとして社会的諸問題の発生が、充分予測せられるので、極めて新しい角度から検討を要する重要な課題であつた。

国際会議参加五七カ国の中、先進諸国は既に現実に悩みつつある問題であり、後進諸国に於ては未だ相当かけ離れた問題であつて、日本は中間に位いし寧ろ課題を厳密に分析して意見を提供するにふさわしい立場のようにも感じたが、研究課題として持ち帰つた訳である。

このオートメイションの実体を少しくここに紹介しておくと、原子力と並んで技術革新の代表的なものとされ、第二次産業革命とも称されるもので、一部にはもはや資本主義や社会主義という制度上の問題は意味をなさない、という見解さえ表明されている。然し日本の場合いろいろの面で制約

を受けるもので先進諸国の悩みと同列ではない。その第一は技術的な面で、オートメイションを完全に行えるのは、生産過程が継続的な流動過程にあるような部門、即ち製油、製粉、化学生産のような部門だけで、どの生産にもできるというものではない。その第二は資本的なものであつて、オートメイション化はしたいが、巨額な資金を必要とし、大資本でないと出来ないことであり、更に既存設備を廃棄し、人件費の節約はでき能率は向上したとしても、投下資金との関係で採算がとれるかどうかの問題。その三は市場の制約と関聯する点である、即ちオートメイション化は普通の市場の拡張程度はだめで、常に膨脹的市場を必要とし、これが伴わないとその威力は発揮できない。

機械化は肉体労働を緩和し、オートメイションは併せて頭脳労働をも節約する可能性を与えると言われる。果してこの技術革命で人間の労働からの解放、社会的な福祉面の充実が向上実現するであろうか。

この度の国際会議に於て知るところによれば事態は、そう楽観できないもののようである。アメリカでもイギリスでもオートメイション化は、寧ろ労働を排除する傾向にあり、然もそれが、広大の地域に急激に影響を与えるところに社会福祉面の問題があると指摘されている。日本と異なつてそれが完全雇用に近い状態においてさえ問題が指摘されるのであるから、アジアを含めて日本に於ては問題である。

政治が真に強力にして福祉保障の線に進み、考え方の基本が守られて、一部資本家の手にオートメイションが進められることでなく、即ち営利追求者の手にのみゆだねられずに、人間の労働を少しでも軽くし、幸福を分ち合い助け合うという方向が採られるならば、互いの労働時間は短縮し民族の福祉は向上するであろう。

従つて国際的に観るオートメイションの問題は現代の重要な課題である。日本の場合は雇用の問題が解決されていないので、この課題と取くむのには充分の研究が必要であるが、先進諸国と後進諸国のそれぞれの立場に於ける悩みを併せ検討し、日本が国際的視野に立つて会議を通し、世界の人類に貢献するところのある研究をささげたいものである。

×

この国際社会事業会議は、一九五八年（昭和三十三年）日本の東京で開催されることに決定しており、主題は「社会のニードに対する諸資源の活用並びに展開」と定められている。時期は十一月三十日から十二月五日までで、出席者は一、五〇〇名位、会議参加費は一人十五ドル（邦貨五、四〇〇円）となつており、日本国内委員会も準備態勢に入つている。

×

ボン並びにミュンヘンの国際会議終了後、約一カ月の日数をかけてドイツ各地を親しく観てあるくことができた。その目的は、

(1)働く人間と厚生施設の関係　(2)恵まれない児童のための施設の二点にあつた。

西ドイツの経済復興は奇蹟とまで言われているが、働く人間と、その人間の持つ労働意欲とは如何なる関係にあり、その意欲はどこから生まれているか、興味ある問題である。ボンの大使館で手にした西独経済統計によると、今や失業者は百万台を割

り、失業率は五%に位いしている。これを一口に経済情勢の好転といってしまえば、それまでであるが、ドイツ各地を巡つて感じることは、家庭に、職場に、街頭に、個個の持つ労働への意欲である、その意欲がドイツの場合、まことに旺んなものであり、然もその意欲がいかにして生活の中に持続性をもつているか、勿論歴史に根ざす国民性の問題もあろうが、興味ある問題である。

客観的な観察として言えることは、各人が生活とともに労働を、労働とともに生活を楽しんでいる姿が、民族に拡がりを持つていることである。そして家庭と職場につながりを持つた、栄養と休養、レクリエーションの問題が極めて重要に扱われていることであつた。大工場などではその幹部の人々の考え方が厚生部の働きを、生産性のポイントであり、危害防止、安全への鍵であると、説明してくれたのには、その優れている考え方や態度に敬意を表せずにはおれなかつた。

家庭に恵まれない児童のための施設も、ボン、ミュンヘンをはじめ各地のものを見たが、全体的に大規模な施設の形態を避け、ホームの感じを失わないように、またホームの感じに近づく努力をされているので、その方針や方向は、日本の最近の研究と一致して居り妥当性があると思われた。どの施設も自然の美しさを尊んでおり、建物の内部は色彩感覚が充分に考慮されているほか、清潔度が高いのが特徴として見られた。従事者はキリスト教信者が多く、施設そのものの経営主体も民間の場合、六五%以上が宗教団体の手によるものである。（一九三九年ドイツ国民の六〇・六%がプロテスタント、ルーテル派であり、三三・三%がローマンカトリックであつた）施設は一般的にその施設長を重く見る傾向が強く、専門家の養成などは時間がなくて訪ねられなかつたが日本程重要視していない感がある。

以上ドイツに於ける児童及び社会、二つの国際会議を中心に、極めて平易に報告を取りまとめたものである。

昭和卅一年度卒業新制七回生卒業論文題目

インドの社会事業に関する一考察　池館順子

明治期のセツルメント運動とその背景　花巻ヤス子　林絹代

猪瀬和枝　前沢久美子

村越しう子　西川敦子

大井洋子　島津百合子

円山洋子

児童読者の概観と事例調査　松山愛子　狩野節子

失対自由労働者の組合活動　荒木明子　加藤澄子

平井町子　大城栄子
長友米子　和田ヤウ子
野地タカ子　三村喜久

保護観察に関する一考察
田島郁子　森田珠代

貝原益軒と慈恵思想
鈴木園子

ヘーゲルの社会倫理
細川千里

身分よりみた家族制度の動き
——古代から近世まで——
後藤千寿　福岡康子
花形もと子　藤田満里子

北川辺村に於ける貧困世帯の実態
赤井洋子　宮沢尚子
山下知子　出口靖子
大野世喜子

北川辺村社会福祉協議会に関する一考察
水野歳子　平田キヌ子

一人子のパーソナリティについて
——母親の躾態度を中心として——
河野喜美子　田島京

テレビの児童に及ぼす影響について
太田珠江　佐藤章子

我国養護施設の動向
——施設長を主軸とした調査を中心として——
工藤とも子　富塚陽子
宇都宮万代　山岸ひろ

少年院の交友関係
今西美奈子　黒川徳子
豊田美智子　斎藤裕子

児童福祉に関する地域組織化の困難性
佐藤道子　武半やす子

分裂病患者と家族との対人関係
高田令子

現代視聴覚教育の動向とその可否について
西江麗子